

正調と軽芸術

かたちとところのつながりを探る

山貝 征典¹

Original Form (Seicho) and Light Arts (Kei-Geijutsu)

Through the Connection Between Form and Mind

*Masanori YAMAGAI*¹

Abstract

The article was centered on the keyword "Seicho(original form)". From events such as Handicrafts, Peasant art, and Min'yo -Japanese traditional folk songs, we will summarize the contradictions that arise when art is expressed, the discomfort that appears when art connects with society, and consideration based on collection and experience. Feel the difference in attitudes and perceptions between the creator and the recipient, and consider the attractiveness that appears while accepting the difference.

キーワード：正調、軽芸術、現代美術、手芸、民芸

Keywords：Original Form , Light Arts , Contemporary Arts , Handicrafts , Folkcrafts

1. はじめに

本論では筆者が進めている軽芸術研究¹において近年取り組んだ事例、展覧会やアートプロジェクトの実践から見えてきた新たな視点などを取り上げる。正調というキーワードを軸に、手芸、農民美術、民謡などの事象から、芸術が表現される際の発信者と受容側にみられる矛盾やずれ、芸術と社会がつながり動く際に出現するくい違いや課題、加えて作品・造形物の収集や体験に基づく考察をまとめていく。本学が立地する長野県内には、本考察事例に関わるいくつかの重要な事象が点在している。上田市立美術館にまとまった常設展示もある洋画家の山本鼎が提唱した農民美術運動、また同じ上田市内の信濃国分寺（八日堂）において毎年1回年始の縁日で頒布される蘇民将来の造形に見る軽芸術性。信濃追分にて歌い継がれ全国に波及した追分節（追分唄）における、伝統の継承や現代的解釈時に出現する正調の問題などを取り上げる。

芸術表現やそれに類似する造形やパフォーミングアーツなどを受け取る際に、軽芸術の視点や態度を応用し、俯瞰しながら注目を続けている。被災時・非常時における芸術が関係するふるまい、つらさや厳しさを乗り越えまたは寄り添いながら生きていくことができること。つくり手と受け手の態度や認識のずれを感じ、またはそのまま「ずれ」を受け止めながら現れる特徴などについて、正調というキーワードを底通させながら取り上げていく。

2. 手芸が持つ軽芸術的ふるまい

軽芸術の視点をとらえる際に、以前から気にかけていた手芸という事象・行為は、まさに軽作業であるその仕組み、社会からステレオタイプに認識される立場のずれからくる魅力がある。筆者は1977年生まれであるが、この世代²は裁縫を含む手芸的なものを取り巻く学校教育も過渡期であったよう

で、中学・高校時代には、今では考えられないが女子が家庭科で男子は技術という、性別での授業分けが存在していた。家庭科が男女共通必修（男女共修）になり全面実施となったのは1994年のことで³、これは筆者が高校3年時にあたる。ちなみにそれ以外でも中学高校を通じて女子がダンスで男子は武道（強制的に剣道か柔道をやらされる）という差もつけられており、当時においてもかなり違和感があり、とてもいやな気持ちになった。こちらは1989年の学習指導要領改訂で男女共修・選択制となり、2008年ようやく中学1・2年生で男女必修化が告知、2012年に完全実施となった⁴。

さて、ここで手芸の意味をあらためて確認してみると、【手先でする技芸。編物・刺繍(ししゅう)など。】Oxford Languagesとある。さらに詳しいものを探すと、このようなものもある。【一般には家庭内で布や糸、針などを用い手作業によって加工、加飾を行い、室内装飾品や衣服などの装飾品を製作することをいう。手わざ、手仕事、手工、手技(伎)、技芸、マニュアル・アート manual art、ハンディクラフト handicraft、ハンディワーク handiworkなどの呼称がある。手芸の技術には多くの種類があるが、表現の形態から二つのタイプに分けられる。まず、その技術で物の形が加工されるものを独立手芸と呼び、織物、編物(レース類を含む)、袋物、細工物(皮革、ビーズ、押絵、つまみ(摘)細工)、造花、人形細工などが含まれる。】世界大百科事典 第2版。

これらは特に違和感なく納得できる手芸の説明だろう。手芸はテキスタイル系の素材により衣服や家庭内の実用品を製作する行為、またそれによって製作された物をいうが、元々の意では手先の技術そのものを指していたようだ。次章の農民美術の項にもつながるが、1919(大正8年)に山本鼎、金井正らによって発表された「農民美術建業之趣意書」に、下記のような記述がある。「予定の製作品目は、木彫人形、彫刻を施したる各種の木製器具—彩画に飾られたる木製器具、及び陶器—刺繍或は染色によって装はれたるクッション、卓子掛け袋物、—特色ある意匠による各種の家具—壁紙、壁画、敷物等であります⁵」※傍点筆者。



図2-1 筆者の友人が主催する手芸の集いの様子

筆者が手芸という事象に関心を持った1つの出来事に、2011年に東日本大震災が起こったのちに、手芸の力でその生活やコミュニティが支えられたというものがある。それは、着るものがないから裁縫によって作って寄付したなどというような実用的なことではなく、手芸サークル的集いと、そこで裁縫・手芸をすることそのもの、またそのために集まってサークルを形成することそのものが重要であった視点である(さらに、その後の2020年の新型コロナウイルス騒動では、図らずもその手芸の実務的部分もクローズアップされ、マスク不足への対応場面でそのものづくりの力を発揮することになったことも、今後は注目していきたい)。この事象について、NPO法人 LIFE KNIT 代表の横山起也は、手芸が持つ課題解決能力、人々に寄り添う力、軽芸術的効能について下記のように述べている。

「たとえば「急に家族が亡くなってしまった」とか「まだ特効薬が見つかっていない新しい病気が流行し始めた」などの「解決が難しい問題」について同じように考えたらどうなるだろうか。解決ができず、途方に暮れてしまうだけだ。パニックになり、思考が停止し、最終的には「自分」を見失ってしまうこともある。そんな時、必要なのはその問題と「心の距離」をとって、「自分」を取り戻すことであるが、それはなかなか難しい。長い時間

や特殊な環境が必要なことが多いからだ。しかし、手芸をする人たちは知っている。手を動かせば良いことを。そうすれば自然と集中し、他のことと「心の距離」をとることができ、「自分」のリセットができることを⁶⁾

上記論考の中で被災時・非常時に手芸の集いに誘われた人は、最初はそれどころではない思ったが、実際に手芸をする時間を持った際のかげがえのなさ、心の持ち用への効用がありがたかったとも語っている⁷⁾。おしゃべりしながらいつでも軽く作業ができるという特徴、すぐにはどうすることもできない出来事に寄り添ってくれる、ものづくりを介した時間の過ごし方に効能があるようだ。

また筆者のフィールドである現代アート領域と手芸との関わりをみてみると、2009年に東京都庭園美術館で開催された「ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描くわたし⁸⁾」展が思い出される。手塚愛子、伊藤存、秋山さやか、奥村綱雄などによる、針と糸で行われる手芸・刺繍の行為が関係する作家たちを集めた展覧会であった。その8組の参加を称して、企画者で東京都庭園美術館の八巻香澄は「彼らは刺繍工芸の人間国宝でもなければ、NHKの「おしゃれ工房」に出演したり「刺繍の貴公子」と呼ばれたりするようなクラフト作家でもない⁹⁾」と述べている。実際に私も展示を見たが、いわゆるステレオタイプの手芸の感覚を認識することは無かった。しかしはっきりと、社会とアートと手芸(的なもの)をつなぐ新しいイメージ、ユーモアとシリアスの同居、そしてそのずれさえも含みキュレーションされているすばらしい企画であった。



図2-2,3 東京都庭園美術館「ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描くわたし」展の様子(初日内覧会)

このような手芸のありようや美術表現とのつながりについて、国立民族学博物館の上羽陽子は「手芸的技術の特徴は、技術教授が比較的容易であり、基礎的手作業によって作りあげることができるものが多い。このような手作業が、造形教育においてどのようにとらえられてきたのか注目する必要がある。そして手芸の手仕事がどのような文脈の接合によって、現代アート作品へ転換するのかについても視点をひろげて議論をする必要性がみえてきた¹⁰⁾」と指摘している。今後も手芸が持つ、広く社会に認識されているイメージと、ギャップのあるその本質に見える凄み。技法や素材が持つ軽やかさや上質さと、それに反比例するような厚みのある表現の出現、などをとらえていきたい。

3. 農民美術にみる競う心

長野県内では、農民美術運動の第一人者でもある洋画家の山本鼎による教育活動に端を発し、現在でも農民美術に関する工芸の制作や教育活動が盛んである。実際に同世代の友人も、現在こっぱ(木端)人形の制作を習っている。



図 3-1 農民美術運動の流れを伝えるこっば人形



図 3-2 こっば人形制作の様子

版画家で農民美術教育者の山本鼎は、絵画修行で4年間を過ごしたフランスからの帰路の際に、モスクワの農民美術蒐集館で北欧やロシアの農民が冬期間に制作した素朴な木の人形を目撃する。またロシアの児童が描いた絵の自由さに感動し、日本においても美術教育を改革する必要性にかられた。長野県小県郡神川町にて、前章にも示した「農民美術建業之趣意書」を配布し、神川小学校の教室を借りて農民美術練習所を開所し活動を始めた。経済的困窮や戦争の影響などもありその運営は困難を極めたが、現在にもその運動や思想は受けつがれている。その流れの1つでもある優れた民芸的造形事象として、蘇民将来をあげることができる。

上田市の信濃国分寺（八日堂）に伝わる蘇民将来は、全国各地にある同じ伝承にみられるものの一つで、その優れた造形や頒布の伝統は、2000（平成12）年に国選択無形民俗文化財「上田市八日堂の蘇民将来符頒布習俗」に指定されている¹¹。信濃国分寺の蘇民将来は、寺周辺の地域に自生している加工しやすいドロヤナギ（白楊）を六角錐型に立体にカットし、赤と黒で模様と文字を入れた護符である。文字は本体部分の6面に「大福・長者・蘇民・将来・子孫・人也」と書かれ、それぞれの下部には九字¹²を切るかたちを模したとされる文様が描かれている。蘇民将来（符）は全国各地にあり、お札状のものや立体のもの、しめ縄と合体しているもの、またその文言の差などもあり民俗学的比較研究もとても興味深い¹³。この蘇民将来は大きく分けて2種類あり、住職が作成し寺が準備する標準的な意匠のものと、蘇民講と呼ばれる信濃国分寺の門前に家を構えていた人々の講（集団）が制作するものがある。蘇民講が制作する絵入りの護符は絵蘇民を呼ばれ、その家それぞれで受け継がれている七福神の絵が描かれ、限定で頒布される

上田での蘇民将来は1体千円～8千円程度で大小6種類が販売（頒布）されている。図3-3に示したものが小で一番安い量産型のものである。これが一番バランスもよく格調の高さも出ており、美しいと感じる。筆者は長野に移住してきて以来、2013年から現在に至るまで毎年手に入れることができる。例大祭は毎年1月7日・8日に行われ、8日の早朝からのみ限定で、蘇民講が制作した絵蘇民が頒布される（図3-6）。



左：図 3-3 筆者が収集している蘇民将来、上田の信濃国分寺で 2013 年から毎年年初に購入

右：図 3-4 九字（『九字護身法』 博文堂庄左衛門 1881 年 2 月）

筆者も以前に一度だけ、早朝に上田まで出かけこの限定の絵蘇民を買ったことがあるが、すぐに違和感を覚え気に入らなくなってしまい、翌年には寺に納めてしまった。なぜ気に入らなくなったのかをあらためて考えてみると、限定の品はその制作にあたり特別に気合いが入ってしまっていることから来る、違和感を感じたからであった。絵蘇民は、他の講より艶やかに豪華に上手に、値段に見合うように 1 点ものとして制作、講ごとに意匠を凝らし個性・腕を競っている。描く際の手本となる蘇民画帳¹⁴が各家々に残っているなど貴重な文化の伝承としての活動となっており、かわいらしくユーモラスな絵は民芸的価値も高いようにも感じる。しかしこの限定の絵蘇民には、ある意味雑に扱われることもある量産型蘇民将来を最初に見た時の美しさの衝撃、心に訴えかけてくる格調の高さとはなにかが違っていた。描かれた絵の好き嫌いはあるとしても、それだけではない「競う心」により、本来にじみ出るはずの格調の高さ、匿名性からくる美しさが薄れてしまっているのかもしれない。とはいえ、元々の農民美術運動の原点としての手芸（手工芸）の重要性、冬季間の労働と収入につながる価値づけの向上、文化の継承、造形能力の鍛錬もちろん大事だ。ボランティアではないし、廃らないようにその技術をつなぎ後世に残し、適切な金額を得ることができることは、まさに農民美術の本質でもあるところが、もどかしい。



左：図 3-5 信濃国分寺資料館で展示されている古い蘇民将来

右：図 3-6 七福神などが描かれ限定で頒布される蘇民将来（絵蘇民）

4. 正調〇〇節：民謡における正調の問題

現在の軽井沢町大字追分は、中山道と北国街道の分岐（追分）に当たる、江戸時代ににぎわいをみせた宿場であった。現在もその街道の風景や民家が残り、観光地としても知られている。この信濃追分は、各地に伝わる唄としての追分節発祥の地とも言われている。信濃追分の宿で飯盛女が酒の席で歌い出した、三味線の伴奏による騒ぎ歌が「追分節」であり、その元には小諸の馬子唄¹⁵があるとも言われる。この信濃追分が越後に伝わり越後追分（新潟県）に、さらに日本海側を北上し酒田追分（山形県）、本庄追分（秋田県）となり、各地土着の唄なども混ざりながら北海道に渡り松前追分、そして有名な江差追分となったとする説もある。



図 4-1 溪斎英泉《木曾街道六拾九次 追分》

このような馬子唄や牛追い唄、追分節などは、現在では民謡となり各地で歌い継がれている。その文化の継承の中で「正調〇〇節」というスタイルを示すものが多い。しかしこれらの唄は元々は労働歌であり口伝により広がり、また変化するものである。労働や日常生活と切り離せないし、そのつどの気分や環境、唄い手の技量や観客との兼ね合いにも左右されるから、譜面に起こしたり録音することもなかった。変わっていくことがその標準的スタイルであったのに、正調化させてしまうと、そこでその唄の息吹・流れが止まってしまう。馬や牛への愛しみ、分かれ道でのさびしさやにぎわい、恋心、叫びたい心情の吐露、歩くリズム…などをごちゃ混ぜにしたストリートソングであるにも関わらず、「伝統芸能を守ろう」「継承される芸術」「歌唱の競い合い」などの状態にして歌い継いでしまうことへの、違和感と恐ろしさがある。

ステージ上でマイクからPAを通して、照明を浴び歌われる馬子唄や追分節は、大枠では元々の唄に似ているメロディーや歌詞が再現されているだろう。近代から眼差した一つの定型の音楽としての意味はあるものの、その元来の意味は死んでしまっているのかもしれない。この課題について、三味線奏者で北日本民謡舞踊連合会理事長も務めた矢後秀紘は、「戦後、使われるようになった言葉に「正調」という言い方がある。この「正調」が生まれた背景には、大衆芸能である民謡を、伝統芸能と呼ばれるものに仲間入りさせてもらおうという考えがあったのだと思う。」「現在、「正調」と言っているのは、長い間ずっと姿を変え続けてきた歌の、ある時期、ある時点を「正しい」型として決めてしまったものだ。自由であったはずの歌の広がりや、たった半世紀前に自ら窮屈に限定してしまったのだ¹⁶」、ときびしく指摘している。

歌舞伎、能、相撲、浪曲、追分唄など、ストリートにおける活動や表現であったものを盲目的に定型化し舞台に載せることは、実は危うい取り組みでもある。しかし矢後はこのように完成された芸能自体は否定していない。その節や歌詞自体の優れている要素は、何らかのかたちで伝承し受け継ぐことも必要で、ただしそれらを正調＝正とするのではなく、きちんと「古調」とした上で伝えるべきだ、としている¹⁷。このように伝承されている伝統的表現は、発表する際に抜け落ちてしまう俗の部分、揺れがとて多い。それらは譜面化・図面化できないしデータにすることが難しい。また現代の規範にのっとると反社会的だったり猥褻であったり、差別的な表現もある。現在では大芸術的にありがたく鎮座する歌舞伎の出自や、国技となってしまった大相撲の興業システムなどを少しだけ遡れば、まったく聖人然としているようなものではないことには、すぐに気付くことができるだろう。

「聞いただろう？能をやってるんだぜ。オレはそれほど詳しくないが能っていうのは大昔の貴族や武士のものだろう、連中は他にもその辺に落ちてる棒みたいなので銃剣術をやったり、ゴミくずみたいな和紙を作って短歌を読んだりしてるんだ¹⁸」作家の村上龍は、もし戦争で日本がまだ降伏しておらずにゲリラ戦を続けていて、誇りを持って世界から注目される文化を維持しているであろう架空の姿を描いた小説の中で、伝統を守ることを履き違えて凝り固まってしまった悲劇について、上記のように鮮烈に描写している。

5. おわりに

テレビの料理番組の中などで、フランス料理の盛り付けを見て「まるで絵画のようですね」などのように褒める場面があるが、ステレオタイプに絵画や彫刻をトップとして純粋芸術を崇める姿勢が見え、バカにされたような気持ちになる。純粋芸術というレッテルを貼っておけば、それ以上は一般大衆にはいじることができないだろうという、有無を言わずに何者かに設定してしまう拒絶と思考停止がある。

手芸におけるものづくりへ向かえる軽やかさ、農民美術における造形の伝承、コンテストで唄いづく民謡ソングたち…それらすべてに実施者（制作者）側には、確たる動機と意思がある。その表象されたものへの評価や、安易な姿勢での格付けは慎まなければいけないのかもしれない。その人自身へのなぐさみ、制作することそのものの効用、金銭的効果、コミュニケーションツールとしてなど多様な価値がある。もちろんそれらは尊重しながらも、一方ではつくられたモノ、発表されてしまった表現は、どこかで私たちが受け止める場面も出てくる。もらっても困る手芸もあるし、優れていない造形にも出くわす。聞くに耐えない音楽が発せられることもあるだろう。手芸的に一生懸命作られた、よくわからない和紙を貼り付けたペン立てを不意打ちでプレゼントされた時に「ちょっとダサイからいらぬです」と即座に言えるだろうか。表象されたもののクオリティやセンス、贈られてしまったプロダクト、図らずも聞こえてしまう音楽、などへの返答や態度に困る場面は、少なくない。このような違和感・不安感などへ対する自立した態度の意味は、軽芸術の視点として考察していくべき課題として今後も続けていきたい。

最後に、本論の中で使用したすばらしい写真を提供していただいた友人および学生に厚く御礼を申し上げます。

【参考文献】

- 石田あゆ「＜研究ノート＞震災支援としての婦人雑誌のメディア・イベント」『京都社会学年報 第12号』京都大学文学部社会学教室、2004、pp.169-184
- 清原桂子「震災復興と社会教育・生涯学習」『現代社会研究 創刊号』神戸学院大学現代社会学部、2015、pp.130-136
- 山口睦「手作り復興商品にみる被災地性の演出と脱却 — 東日本大震災を中心とした考察」『観光学評論 Vol.6-2』観光学術学会、2018、pp.191-205
- 東京都庭園美術館編著『ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描くわたし』求龍堂、2009
- 濱田琢司監修『新しい教科書 民芸』ブチグラパブリッシング、2007
- 深澤直人監修『工芸とデザインの境目』六耀社、2016
- 高木崇雄『わかりやすい民藝』D&DEPARTMENT PROJECT、2020

【注】

- ¹ 山貝征典「実践方法としての軽芸術」『清泉女学院大学人間学部研究紀要 第16号』清泉女学院大学、pp.67-76
- ² 朝日新聞出版「就職氷河期世代は、93年から2004年ごろまでに社会に出た世代だ。第2次ベビーブームの団塊ジュニアを含む約2千万人がこの世代に該当し、大卒なら現在は30代半ばから40代後半。この世代は“ロストジェネレーション”とも言われる。新卒時に新卒の求人倍率が極端に低く、就職がうまくいかなかったり、不安定な雇用のまま働き続けたりした人たちも多いといわれる」『週刊アエラ』2020年12月21日、p.31
- ³ 藤田智子「大学生の「家庭科」に対するイメージにみる男女共修家庭科の意義と課題」『名古屋女子大学 紀要 59』名古屋女子大学、2013、pp.1-12
- ⁴ 中村恭子「中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—」『順天堂スポーツ健康科学研究 第1巻第1号（通巻13号）』順天堂大学、2009、pp.27-39
- ⁵ 上田市マルチメディア情報センター「山本鼎アーカイブス-農民美術のはじまり-」
<https://museum.umic.jp/yamamotokanae/movement/>（2021年2月12日最終閲覧）
- ⁶ 横山起也「コロナ禍で見直された「モノが作れる力」。マスクが買えなくなった時、手芸が教えてくれたこと」HUFFPOST、2020年12月30日、https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_5fcd9e1fc5b6636e09268103（2021年1月11日最終閲覧）
- ⁷ 同注4
- ⁸ 2009年7月18日（土）から9月27日（日）にわたって開催された。
- ⁹ 東京都庭園美術館編著『ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描くわたし』求龍堂、2009、p.85
- ¹⁰ 上羽陽子「手芸とはなにか—余暇的・趣味的仕事の分析から—」『民博通信 2016 No.152』国立民族学博物館、pp.22-23
- ¹¹ 文化庁広報誌「ぶんかる」祭り歳時記 014、2016年12月12日、
https://www.bunka.go.jp/prmagazine/rensai/matsuri/matsuri_014.html（2021年2月12日最終閲覧）
- ¹² 九字（くじ）は、道家により呪力を持つとされた9つの漢字のこと。
- ¹³ 上田市デジタルアーカイブ「蘇民将来符」<https://museum.umic.jp/somin/index.html>（2021年2月12日最終閲覧）
- ¹⁴ 同注11、「蘇民将来符-その信仰と伝承 蘇民将来の形と図柄」
https://museum.umic.jp/somin/sominshou/s_katachi02.html（2021年2月12日最終閲覧）
- ¹⁵ 馬追いが馬をひきながら唄う歌のこと。
- ¹⁶ 矢後秀絃「第6回 伝承される民謡」『県民カレッジテレビ放送講座テキスト 平成12年度 ふるさとに謡ありて～富山の民謡～』、<https://www2.tkc.pref.toyama.jp/contents/furusato/tvkouza/00minyo/t00-6.html>（2021年2月12日最終閲覧）
- ¹⁷ 同注11
- ¹⁸ 村上龍『五分後の世界』幻冬舎文庫、2002、p.261

（受付日：2021年3月4日）